

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学農学部2年 Chen Hwan-Chi

①学習成果

今回のプログラムを通じて、カタルーニャ語とスペイン語の授業に参加し、まずは話してみることの重要性を学びました。文法の知識が不十分でも、自己紹介や挨拶ができるようになり、言語は完璧に使いこなすことよりも、コミュニケーションを取ることが大切であると実感しました。

また、カタルーニャ自治州の言語政策やカタルーニャ語の使用状況についても学びました。カタルーニャ語の保全や普及に関する現地の取り組みを知ることで、マイナー言語の維持の重要性に関心を持つようになりました。自分の出身地におけるマイナー言語政策の改善についても考える契機となりました。

②海外での経験

スペインでの生活を通じて、ルールに対して柔軟な考え方を持つことの大切さを学びました。スペインの人々は、ルールを厳格に守るのではなく、問題がなければある程度の余裕を持って生活していることが印象的でした。この考え方は、ストレスを軽減し、よりリラックスした生活を送るために役立つと感じました。

また、現地の人々とカタルーニャ語でコミュニケーションを取ることで、単に言語を学ぶだけでなく、より深い交流が可能であると実感しました。英語を使えば十分に意思疎通ができますが、現地の言語を話すことで、相手が喜んでくれることを実感しました。

③プログラム内容

本プログラムでは、カタルーニャ語とスペイン語の授業に加え、現地の先生からカタルーニャ自治州の現状について直接学ぶ機会がありました。言語政策や多文化共生の取り組みについて深く理解することができ、世界の言語多様性の保全について考えるきっかけとなりました。

また、プログラムの一環として、移民の子供たちが多く通う公立小学校を訪問し、多言語環境での教育の現状を学びました。異なる母語を持つ子供たちが、学校ではカタルーニャ語、スペイン語、英語などを共に学びながら、自由に遊び、交流している様子が印象的でした。この小学校では、多様性の尊重が言語政策の重要な柱となっており、校内には子供たちの作品が掲示され、それぞれの国の文化的要素が反映されています。また、4歳から小学校6年生まで、さまざまな国や地域出身の子供たちが在籍していますが、皆が分け隔てなく友達として接し、平和に遊びながら日常を過ごしていました。人種問題や移民問題が大人の世界では対立を生むことが多い一方で、子供たちは自然に共生している姿を見て、その純粋さと寛容さに深く感銘を受けました。

今回のプログラムを通してスペイン語とカタルーニャ語を上達させることができなかったが、言語を使うことへの抵抗が減り、勇気を持って話してみることの大切さを学びました。以前は、完璧でない外国語を話すことが他人の迷惑になるのではないかと考えていましたが、実際にスペイン語で話しかけると、現地の人々は親切に対応してくれました。

④ 進路への影響について

今回の経験がきっかけで、将来的にヨーロッパの大学院への進学や交換留学を検討するようになりました。単なる旅行ではなく、実際に現地で生活することで、人は最も成長できると感じたため、今後もさまざまな海外経験を積み、異文化理解を深めていきたいと考えています。